徳山ダム視察調査報告
—交流産業資源の掘り起こしとして—

竹　内　治　彦*

揖斐川水系は、木曽三川のうちで、もっとも短い。大雨時の洪水などももっとも速くなるので、早期や日頃からの対策が必要である。そうしたことから様々な工夫、対策、施策が講じられてきたところであり、川とともに暮らす日本人の暮らしを守る施設を視察するには格好の場所である。2007年度は大垣の交流産業研究会で地域の資源の掘り起こしをしていたのだが、その観点で目に付いた3ヶ所について報告したい。

徳山ダムは堤高161m、堤頂長427.1m、総貯水容量、約6億6000万㎥である。貯水量は日本一の規模で、ダムの広さは浜名湖の2倍になる。但し、渓谷が上流に向け太くなる形状なので景観的としてダム湖そのものに特段の魅力は感じられない。むしろ、特筆すべきは周辺の山林である。旧徳山には6カ村があり、周辺山林は入会地だった。ダム建設による移住の際に、これらの入会地は買収され、すべて公有地化された。この地域では、明治時代に製紙会社によって全山伐採が行われたが、その後、人口的な植林は行われず、自然に林が回復され、今日に至っている。植林されたスギやヒノキの森林では、自然な形で森林交代が進んでいくことは期待できないが、この地域のような自然な林なら、森林交代が進み、やがてブナ林に成長することも夢ではない。ちなみに、周辺、公有地の広さは白神山地の2倍ある。

徳山ダムの建設にあたっては、建設反対者からの声に配慮して、とくに周辺の生態系を維持する努力がなされている。結果、猛禽類の営巣地なども保存されている。川辺を走る国道417号線が福井方面に開通して、交通量が増える懸念もあるが、名古屋から1時間圏内の地域に、奥日光や白神山地と比肩しえるような自然が広がるのは貴重である。しっかりと自然を守っていくことが、将来の交流産業資源形成になると考える。

徳山ダムは中央遮水壁型ロックフィルダムで、内部施設を見学できるようにはなっていない。現在、すぐ下手のところで、中部電力の水力発電所が建設されているが、こちらでは始めから内部見学を考えた施設が設置されると、小中学校の社会科見学時の見学場所として有力なターゲットになると思われる。

内部を見学できるという点で注目されるのが、藤橋から少し上手に上がった所にある横山ダムである。このダムが建設された昭和中期は、まだコンクリートは人件費に比して高価だった。そのため、コンクリート量を節約する構造として中空ダムが考えられた。また、中空ダムは、台形型に接地面を広く取り、ダムに乗る水の圧力によってダムに下方向の力が加わるので、通常のコンクリートダムより安定度も高い。しかし、中空構造は当然工数が多くなるし技術も高度になる。そのため、コンクリートの価格低下にともない、造られなくなり、現在、残っているのでは13基だけだということだった。

実は、どのようなタイプのダムでも、内部に維持管理のための空間が空けてあるらしいが、中空ダムの空洞部分は広く、コンクリート製の鍾乳洞を想像してもらえばよい。ダム湖の湖底の水温は1年を通じて5度程度で一定している。それに対応してダム内空間の気温も1年を通じてほぼ16度程度で安定しているということだった。これも、天然の鍾乳洞と同様の特徴である。今回の視察は夏の暑い時期だったので、中は涼しく結露によってあちらこちらに水たまりができ、特異な雰囲気の空間ができあがっていた。ダムの最低部のもっとも広いスペースは、ホールになっており、コンサートや大声コンテストが催されることもあるということだった。

*経営学部教授

実際に使用しているダムであり、安全管理上から、あまり簡単に入場できるようにするのは難しいだろうが、グループで事前予約すれば内部視察は可能ということだった。ダムをより理解していくうえでも訪れてみたい場所である。

徳山ダム観光の起点となるのが道の駅ほしのふるさと藤橋である。広い駐車場に驚かされるが、工事期間中には工事車両でいっぱいだったと説明されるとさらに驚かされる。この道の駅には、大正の初めに揖斐川電気が横山の地にダムを造り、発電を始めたときに購入したタービンが展示されている。このタービンはダムの改修時に撤去されたあと、岐阜西工業高校に置かれていたが、平成9年に同校が岐阜総合学園に改組されたときに、ここに移設されたものである。この道の駅の奥の方から見渡すと、イビデン東横山発電所の煉瓦づくりの建物が見える。この建物は中部圏の代表的な産業遺産と言っても良く、背後の山から引いたパイプ管を従え、煉瓦づくりが美しく緑に映えている。桜の名所としても知られている。こちらも現役の発電所なので、内部に入ることはできないが、遠景からでもその魅力は十分に伝わるものである。因みに、水力発電のダムは、川の流れをそのまま使って行うのではなく、ダムから大きな配管で取水し、その水でタービンを回すのである。道の整備された今日でも、大垣市街からここまでは45分ほどかかる。完成は大正時代になるが、明治時代の末期から、この地で発電事業をして、電力を大垣に送り産業を興そうとした人たちがいたという歴史は感動的である。大垣の産業の原点がここに見られるといっても過言ではない。徳山ダムや横山ダム、藤橋のプラネタリウムや茅葺の民家を移築した郷土資料館、道の駅の民具のコレクションなど他にも多数の視察対象があるので、大垣の小学校などでは、社会科見学で是非、この地を訪ねて欲しいと思う。そうすることで、明治の先人たちの雄大なロマン、進取の気性を感じ取ることができるだろう。